



寄せ集め

るざき陽真

約束

ずっと一緒にいようよ！

うん！ あたし達、ずっと一緒にいようね！

じゃあ指切りしよう！ 僕達三人の約束！

ゆーびきーりげーんまーん

嘘つーいたーらはーり千本の一ます

ゆーびきった！

これであたし達、ずっと一緒だね！

うん！ 約束だよ？

「……夢？」

目を開けると、そこには真っ白な天井があった。どうしてこうなったんだっけと思って、眠る前のことを思い出す。

（そっか、私疲れてそのまま……）

最初はただベッドでごろごろ転がっていようと思ったが、サークルに行っていて疲れていたこともあってそのまま眠ってしまったようだ。

枕元に置いてあるデジタル時計を見ると、五時三十八分と表示されている。いつもより三十分くらい早く起きてしまったけれど、今からもう一度眠ったらきっと寝坊する。仕方なく私はベッドから降りて、学校へ行く準備をし始めた。

大学に入学してそろそろ三ヶ月が経つ。高校生の時は全く知らない土地に行くという不安もあってか、それまでいつも一緒だった友達と離れたくないと思っていた。けれど大学に入って、何人かとすぐ友達になれた。皆明るくて優しく、毎日笑いが絶えなかった。大学生活があまりにも楽しくて、高校であったことが消えかけてしまいそうなほどだった。

だから、今朝見た夢はとても懐かしかった。

（皆、元気かな）

意識すると、その時の思い出が次々によみがえる。授業中あいつはいつも机に突っ伏して寝てたっけ。クラス会で歌ったあいつの歌は、皆からブーイングがくるほど下手だったな。あの子はまだあいつのこと好きなのかな……懐かしさに浸っていた私を現実に戻したのは、そんな懐かしい人からの一通のメールだった。

送られてきたメールの内容はありふれたものだった。今度の日曜日に地元でイベントがあるから、久しぶりに何人かで一緒に遊ばないかというものだ。特に断る理由もなかった私は、すぐに彰子にメールを返した。

メールにあった通りの時間に行くと、もうすでにイベントは始まっていた。通路の両脇には色とりどりの屋台がずらっと並んでいて、通路の中央にそびえ立つ大木はライトアップされていた

。焼きそばやかき氷など、夏の風物詩とも言えるものを、イベントに来た親子やカップルが、笑いながら美味しそうに食べ歩いている。

「お、来た来た！ おーい、白澤！」

指定された場所に行くと、成瀬が以前と変わらない少し高めの声で、遠くから私の名前を呼んで手を振っていた。周囲の人達はその声に反応して、一斉に成瀬と私を見る。恥ずかしいったらありゃしない。成瀬の隣にいるワンピースの子は彰子だろうか。彰子も恥ずかしいのか、成瀬から少し離れている。

近づいていくと、二人も私の方に近づいてきた。成瀬も彰子も、高校時代とちっとも変わりはなかった。

「久しぶり。二人とも相変わらずだね」

「おう！ 俺はいつでも元気だぜ！」

「あんたはうるさすぎ。彰子が困ってるじゃん」

「わ、私は別に困ってるわけじゃ……」

「古川は困ってないって言ってるぞ？」

「あんたねえ……」

『まもなく肝試し大会を開始します。参加をしたい方は、本部までお越し下さい』

開場にアナウンスが流れる。どうやらこれから肝試し大会が行われるらしい。近くにいたカップルも参加するようだが、明らかに女が猫を被っている。猫なで声で男に怖いと言っているが、その行為は男の気を惹くため、内心は少しも怖がってなんかいないんだろうなと思うと、同性ながら恐ろしく思う。

「俺たちも参加するぞ！」

「え？ あんた怖いの嫌いじゃなかった？」

「たしかに俺は肝試しやホラー映画が苦手だった。だがしかし！ 今までの俺とは違う！」

俺は生まれ変わったのだ！ と勝手に叫びながら、成瀬は拳を高々と掲げている。少し前まで、テレビで放送されたそれほど怖くない映画に、一人で悲鳴をあげて震えていた成瀬とは思えない発言だった。

「彰子は平気？」

「うん、私は大丈夫」

成瀬とは逆に、彰子はあまり怖がる素振りを見せない。

「よし！ じゃあ俺行ってくる！」

そう言うと、成瀬は走った。途中にあった段差につまずいて派手に転び周囲から注目されたが、何事もなかったかのようにそのまま本部めがけて走って行ってしまった。

「愛ちゃんはよかったの？」

「私は別に嫌じゃないよ。むしろこっちから誘おうかと思ってたくらいだし。

そういや珍しいよね、彰子の方から私達を誘うなんて」

「ふふ、たまにはいいかなあって思って」

そう言って彰子が笑う。相変わらず、周囲に花が咲くかのような柔らかい笑顔だ。

「結局、集まるのって私たちだけ？」

「うん。他の人にもメール送ったんだけど、皆忙しいみたい」

「そうかあ……」

そこまで言って、私は彰子の顔色が少し悪いことに気づいた。もしかして、無理してここに来たのだろうか。

「彰子、顔色悪いよ？」

「え、そう？ 別に何ともないんだけど……」

そう言う彰子はいつも通りだった。たしかに特に元気がないわけでもないし、ふらついているわけでもない。私の思い過ごしだろうか……

「ならいいけど……もし具合悪くなったら言ってね」

「うん、ありがとう」

「おーい！ 登録してきたぞー！」

私達と離れているにも関わらず、成瀬は大声でこちらに走ってきた。また周囲の人達が成瀬に注目する。人の注目を集めるという点では、成瀬は天才なのかもしれない。

成瀬はさっきつまずいた段差をひょいっと飛び越えた。流石に学習したようだ。

「お疲れさま。どんな感じなのか説明された？」

「おう！ それぞれ数人ずつの組になって、その森のどこかにある札を取ってこいって、本部のおっちゃんが言った」

成瀬が指差した先には、薄暗い森があった。

夜の八時を過ぎたということもあって、太陽はすでに沈んでいるから明かりがない。道の途中やゴール地点に少くくランプや懐中電灯が用意してあるんだろうが、森の中ということは、町中のような明るさではないのだろう。それにこの場所は山の方に位置しているから、運が悪いと霧が発生して視界が悪くなる。肝試しをするには、なかなかいい雰囲気だ。

「翔君、札ってどういう札なの？」

たしかにそうだ。札と言っても様々な札がある。木でできているだとか、色がついているだとか。

「……それは言ってなかったな」

「え、わからないの？」

彰子の言葉に、成瀬は少し不満そうに頷いた。

「でもまあ、行けば多分置いてあるんでしょ？ だったら行けばわかるんじゃない？」

「そうだね。無事に見つけられればいいなー」

「絶対見つけてやる！ 幽霊なんざ怖くねえ！」

幽霊を気にしているということは、やっぱり怖いのだろうか。素直に怖いと言えばいいのに。

「そういえば、この森って噂があったよね」

「噂？」

この森に噂なんてあったのだろうか……たしかに今こうして見ると不気味に見えるが、この森に関しての噂は聞いたことがなかった。

そしてこういう場合の噂というのは、怖い話であることが多い。

「うん。この森に夜来るとね、たまにぼろぼろの服を着た綺麗な髪の人がいるんだって」

案の定怖い話のようだ。私は森の中に一人たたずむ、ぼろぼろの服を着た髪が綺麗な女の人を思い浮かべた。もしこれが朝や昼の時間であったならあまり問題はない。でも彰子は夜と言っていたから、おそらくその女の方は幽霊なんだろう。

「その女の人……幽霊？」

私がおそるおそる聞いてみると、彰子は私の顔を見て頷いた。

「何も知らない人達は、その女の人に声をかけるんだって。『こんな時間にお一人でどうしたんですか？』って」

「夜遅くに女の人が一人で森にいるなんて、なかなかないしね」

何人かが一緒にいるならともかく、女の人がたった一人で森の中にいたら、そりゃあ声もかけるだろう。

「そうだよ。すると女の人にも答えるんだって。『約束があるんです』って」

「約束？」

そう。と言って頷き、彰子は話を続けた。

「その人には大切な人がいて、ずっと一緒にいようって約束したんだって」

「でも、その女の方は死んじゃってるんだよね？」

「そうなんだけど、女の人に話しかけた人達はそのことを知らないから、こんな所にも危ないだけだし、帰って誰かに連絡した方がいいって言うの。でも女の方は絶対に帰ろうとしないし、なんだか様子がおかしいってことに、話しかけた人達は気づくの」

私は知らず知らずのうちに唾を飲み込んだ。彰子が私の目をじっと見て、話を続ける。

「その女の人ね……足がないのよ」

「ぎゃあああああああ！」

私はびっくりした。悲鳴をあげたのは私じゃなくて、今まで私の後ろで黙っていた成瀬だった。

「ふふ、翔君は相変わらず怖がりだね」

「生まれ変わったんじゃないの？」

「い、いや、怖くない。そうだ！ 怖くなんかないぞ！」

成瀬はまた拳を掲げてそう言っているが、私にはどうしても自己暗示にしか聞こえなかった。

自己暗示をかけている成瀬は放っておいて、私は彰子との話を続ける。

「なんで今まで足がないってことに気づかなかったの？ ずっといたんだったら、誰かが気づいてもおかしくないのに」

「そのことがあったのが、ちょうど今の時期なんだって。ほら、夏の森って草とか木がたくさん生えてるでしょ？ だからその陰にいい具合に隠れてて、よく見えなかったんだって。あと霧がすごかったらしくて、視界が良くなかったみたい。その女の方が着ていた服も足下がわかり辛い服で、私が着てるような長いスカートだったんだって」

「そうなんだ……それで、そのあとは？」

「そのあとはね……」

『肝試しに参加する方々は、本部の方までお集まりください』

彰子の話を聞こうとしたところで、会場にアナウンスが流れた。最後まで話を聞きたかったけど、仕方がない。

「話は一旦中断だね。本部に行こう」

「おっしゃ！ 絶対見つけてやるぜ！」

そう言って張り切る成瀬は、やっぱり自己暗示をかけて無理矢理元気になろうとしているようにしか見えなかった。

本部の人から肝試しについての説明が終わって、私達は成瀬が持った懐中電灯の明かりを頼りに、森の中を歩き始めた。

私が思っていた通り、森の中は真っ暗で、環境もあまり良いものではなかった。

一定の間隔で小さな電球やランプが木に括りつけてあったが、弱々しく光っているだけだった。数が少ないがそれでも目印にはなるし、ないよりはましだと思う。

地面は少しぬかるんでいて、前に通った人達の足跡が残っている。どうやらヒールで森の中に入ってきた人もいるようだ。

空気もじめじめしていて、心地良いとは思えない。にじみ出た汗で頬にはり付いた髪の毛が、よりいっそう不快感を募らせる。

車なんてこんな森の中には走ってないから、自然と聞こえてくる物音は自分たちが進む度に地面や草を踏む音や、草の中で鳴いているカエルや虫達の声だけだった。

そして運の悪いことに、さっきから少しずつ霧が出てきた。早くしないと、本当に何も見えなくなってしまうかもしれない。

「……こっちでいいんだよな？」

懐中電灯の光がかすかに揺れている。成瀬は元々こういう雰囲気苦手だし、他の人の気配もしなければ、目印となる電球やランプもあまりない。きっと私以上に不安なのだろう。

「明かりがある方に進んでるし、こっちでいいんじゃないかな？」

「霧も出てきちゃったし、早く札を見つけて戻らないと」

それっきり、私達は口を閉ざした。

薄暗い静かな森の中、私の不安と恐怖はさらに大きくなる。そわそわと落ち着かなくて、何か話したいと思うのに話せない。口を開こうにも、この森全体が妙な威圧感を放っている。私の思い過ごしだろうかとも思ったが、成瀬も彰子も、あまり口を開こうとはしない。

私はふと、森に入る前に彰子が話していた女の人のことを思い出した。たしか霧が出ている森の中で、綺麗な髪の毛の女の人が一人たたずんでいるんだっけ。ちょうど、今の私達がいるような状況で。

「さっき話したやつ、覚えてる？」

不意に、彰子が下を向いたまま口を開いた。さっきということは、あの女の人の話だろうか。「女の人の話？」

「そう……まだ最後まで話してなかったよね」

「こ、この状況で話すのかよ」

成瀬は笑ってそう言ったが、その顔は引き攣っていた。懐中電灯の光が小刻みに揺れている。もし私が成瀬だったとしても、同じ反応をしたらろう。

「足がないってわかった時、話しかけた人達はどうしたと思う？」

「どうって……普通は逃げ出すんじゃない？」

「そう。その人達も女の人が死んでることによろやく気づいて、悲鳴をあげながら逃げ出した。だけど、逃げられなかった」

「逃げ出したけど、逃げられなかった？」

「お、おい！　そういう話、本当にやめろって！」

成瀬が彰子の話をやめさせようと大声を出した。その声はかすれていて、少し震えている。私も彰子が醸し出す雰囲気怖くなってきた。それでも話をもうやめてほしいと思う反面、話の続きが気になってしまう。

成瀬の声を聞いても、彰子は話をやめようとはしなかった。

「どこまでも追いかけるの。だから、どこに逃げても逃げられない。ずっと追いかけるの」

どこまでも追いかけてくる女の人を想像して、私は鳥肌がたった。そんな話をされたら、場所が場所なだけに余計に不安になる。

「話しかけてきた人達はそのことに恐怖して、必死に逃げる。目を見開いて、悲痛な声をあげながら。恐怖で足ががくがくになるけど、それでも構わずに逃げようとするの。自分達がどこに向かっているのかも知らないで」

妙に喉が渇く。嫌な汗が額に浮かんでいる。心がざわざわして落ち着かない。ただ彰子の話を聞いているだけなのに……どうして？

「必死になって逃げて逃げて……よろやく振り切ったと思って前を見たら、目の前は崖。今まで全速力で走っていたから、当然いきなり止まることなんてできなくて、皆そのまま崖の下に落ちて死んじゃった。ある人は斜面から突き出ている尖った岩に頭から突っ込んで、頭がぐちゃぐちゃになっちゃった。ある人はあまりにも勢い良く落ちたから、その辺に転がってた折れた木に背中から貫かれた。ある人は上から転がってきた大きな岩や木に押しつぶされて、原型がわからなくなるくらいぺっしゅんこになっちゃった。その近くにね、その人がかけていた赤い眼鏡が粉々になって今も落ちてるんだよ」

彰子はそう言って、少し目を細めて笑った。

私は彰子の話し方に違和感を覚えた。何だか話し方が、まるで自分が実際にその目を見たかのようなものになっている気がする。森に入る前は、他の誰かから聞いたような話し方だったのに。

ただの言い間違い？　それとも、この話は本当に……

「あ……あき、こ？」

やっとのことを出した声はかすれていた。喉が渇いて、上手く声が出せない。自分の顔が引き攣っているのがわかる。

ふと、彰子の髪と服に目がいった。彰子の髪はいつもまっすぐで綺麗だ。女の私が見てもそう

思うほど。服だって、足下が隠れてしまうくらいのものだ。そういえば、どうして足下が隠れるくらいの服を着ているのだろう。今の時期にその服は暑いと思うのに……

まさか。そんなはずない。そんなの考え過ぎだ。たまたまじゃないか。きつこの雰囲気のせいだ。こんな暗い森の中で彰子がこんな話をするから、彰子とその女の人が同じように見えるだけだ。

「ねえ……愛ちゃん、翔君」

彰子に名前を呼ばれて、私は全身に寒気が走った。私の後ろから、成瀬の小さな悲鳴が聞こえる。

「覚えてる？ 私達、約束したよね？ ずっと昔に、ずっと一緒にいようって」

今まで下を向いていた彰子が、私と成瀬を見て不気味に笑った。綺麗だった目は光がなく濁っている。白かった彰子の肌は更に白く、乾いた土や赤黒い血のようなものがついている。鼻や口の端には乾いた血がこびりついていて、さっきまで一緒にいた彰子と同一人物だと思えないほど変わり果てていた。

初めて、彰子の存在が怖いと思った。

「う、うわあああああああああ！」

先に動いたのは成瀬だった。彰子から感じる恐怖感に耐えられなくなったのだろう。持っていた懐中電灯をその場に落とし、走って行ってしまった。いつの間にか濃くなっていた霧のせいで、成瀬の姿はすぐに見えなくなった。

「翔君……どうして逃げるの？ 待ってよ」

どこまでも追いかけるの。

彰子の言葉が脳内を占める。そして逃げて行った先には、崖があるということも思い出した。

「愛ちゃんは逃げないよね？」

彰子がこっちを向いた。ひび割れた口で笑っている。

私は血の気が引いていくのがわかった。足が震えて言うことを聞かない。嫌な汗が頬を伝って地面に落ちた。脳が私に逃げろと命令している。逃げなきゃ。

「愛ちゃん……私達、ずっと一緒なんだよね？ 約束、したよね？」

寂しかったんだよ？ そう言って、彰子がゆっくり近づいてくる。

その瞬間、何かの呪縛から解かれたかのように、私は彰子に背を向けて、転びそうになりながらも必死で走り出した。

私の背後から、彰子の笑い声が聞こえた。

逃げなきゃ、逃げなきゃ！

もはや肝試しなんてどうでもよかった。

止まったら何をされるかわからない。もしかしたら、彰子はもう私のすぐ後ろにいるかもしれない。殺されてしまうかもしれない。早く成瀬と合流して、この森から逃げ出さないと。

でもどこへ？ どこへ逃げればいいのか？

「成瀬！」

私は大声を出して、どこに行ったかもわからない成瀬を呼んでみた。案の定返事はない。

走りながら懸命に成瀬の姿を探した。けど霧がさらに濃くなっていて、成瀬どころか周囲にある草や木を見つけることすら難しかった。

「成瀬ったら！」

私はもう一度、残った体力を振り絞って大声を出した。自分でもびっくりするほどの大声だった。

返事は返ってこなかった。

何度も木にぶつかった。

(逃げなきゃ)

前歯が折れたのがわかった。口の中に鉄の味が広がっている。

何度も木の根につまずいて転んだ。

(逃げなきゃ)

転ぶ度に私は泥の中に勢いよく倒れ込んで、顔は泥だらけになった。頬に暖かいぬるぬるした感触がある。尖った石で頬が切れたみたいだ。

何度も草に足を取られた。

(逃げなきゃ)

ジーンズの間隙から入り込んだ草で、少し足首を切った。小さな虫が入り込んできたが、取り除いている余裕はなかった。

何度も体が悲鳴をあげた。

(逃げなきゃ！)

足ががたがた震えて、前に上手く進めなかった。息をするのが苦しくて、肺と心臓がはじけてしまいそうだった。

それでも私は走った。疲労感よりも、彰子に対する恐怖感の方が勝っていた。

「なる、せえ……」

大声を出す力はもう残っていなかった。かわりに涙が出てきた。

どうして。なんで。わからない。どこ。怖い。悲しい。暗い。寒い。痛い。苦しい。辛い。

誰か。誰か。誰か！

「だずげで！」

喉の奥から鉄の味がした。苦しくて咳き込んだ。口の中にあつた血を唾と一緒に吐き捨てて、私はひたすら走った。泥と汗と血でぼろぼろになった右足を前に出した。

あるはずの地面が、そこにはなかった。

「え……」

気づいた時、目の前には何もなかった。ただ、自分が落ちていることはわかった。

(……このまま死ぬのか)

落ちている間は、やけに冷静だった。周りの景色がゆっくり流れていく。頭の中に今までのことが浮かび上がって、一気に駆け抜けて行った。ああ、これが走馬灯っていつのか。

少し先に地面と大きな岩が見えた。きっと私はあの岩にこのまま激突して、顔がぐちゃぐちゃになって死ぬんだ。この勢いなら、内蔵だって飛び出るかもしれない。岩のすぐ隣に、手と足と

首が変な方向に曲がった肉塊が落ちていた。私もあんな風になってしまうのだろうか。

私が最後に見たのは、助けを求めるように岩の下から伸ばされた誰かの茶色く変色した手のようなものと、粉々になった赤い眼鏡だった。

脳内に、子供の頃三人で歌ったあの歌が響いた。

『それでは、次のニュースです。今日未明、山形県鶴岡市にある高館山付近で、男女二人の遺体と、四体の白骨死体が発見されました。警察の調べによりますと、男女二人の遺体と三体の白骨死体の身元は未だに判明しておらず、現在調査中とのこと。四体の白骨死体内の一人は、先月から行方不明になっていた古川彰子さん十八歳のものである可能性が高く、男女二人の体内から大量の針が検出されたことから、警察は殺人事件として、捜査を進めています。

それでは、次のニュースです……』

秘密のお友だち

家の外が騒がしい。彼がそう気づいたのは、重い瞼を開けて天井をぼーっと見ていた時だった。今日は何かあったらと思うと頭を必死に動かしてみるが、寝起きの頭でははっきりとは考えられなかった。ゆっくりと上体を起こし、まだ開ききっていない目を右手でこする。窓からは既に外の光が入り込んでいた。白いベッドから降りて顔を洗いにいく。桶にためておいた水は冷たくて、手で触れただけで、ふわふわとしていた意識が現実呼び戻される。手で水をすくって顔にぱしゃっとかけると、一瞬で閉じかけていた目がぱっと開いた。近くにあった小さなピンク色のタオルを取って顔をふいて、元の場所に戻した。

顔を洗っている最中でも、家の外の忙しそう声は途絶えなかった。大きな声、小さな声、男の人の声、女の子の声……忙しそうではあったがどこか楽しそうなその声に、彼は目を閉じて耳をすませる。

(ああ、この声はあの女の子かな？ こっちの声はきっとおじさんの声だ)

彼の目に、それぞれの声の主が浮かび上がる。金色の長い髪の毛、青いワンピースがよく似合う小さなかわいい女の子と、その子といつも一緒にいる、体の大きな怖いおじさんだ。彼はおじさんの声を聞かずに、女の子の声に集中する。かわいらしい鈴のような声が、彼の耳に聞こえてきた。

(やっぱりいつ聞いてもかわいいなあ)

彼は女の子の声にうっとりとしていた。いつも女の子の声が聞こえる度に、会いに行こう、会いに行こうと思うのだが、思うだけだった。家の小さな窓の下に椅子を置いて顔を覗かせたり、ちょうど今と同じように、目を閉じて女の子の声を聞いたりする。それだけでも彼は十分幸せだった。

「あらメアリー、またお人形さんと遊んでたの？」

「そうよママ！ 今日はこの子と一緒に遊ぶの！」

ふいに聞こえてきた声に、彼は目を開けた。ママと呼ばれたその声は、どうやら女の子のお母さんのようだ。メアリーと呼ばれた女の子の声よりも低く、早口だ。

「今日はパーティーなのよ！ この子のお誕生日なの！」

「あらそう、それはよかったわ。ちょうどクッキーを焼いたところなのよ。そのお人形さんと一緒に食べましょう？」

「クッキーだって！ よかったわねジェニファー！ 一緒に食べましょ！」

椅子を持ってきて家の窓から覗くと、女の子が小さな人形を持って笑っていた。

(彼女と一緒にクッキーを食べられるなんて、あの人形はなんて羨ましいんだ！)

彼は窓から顔を覗かせて、あの人形がボクだったらいいのに、とぶつぶつ呟きながら人形を覗みつけた。人形は笑っている。

「そうだ！ クッキーを食べるなら紅茶が必要だわ！ ティーセットを持って行かなくちゃ！」

そう言った女の子の手が、彼の家のドアへと伸びてきた。彼の心臓はどきどきしていた。ドアの把手はたしかに回ったのだ。ようやく会うことができる。

家のドアが開き、家の中に光が差し込む。彼は嬉しくなって、家の中に入ってきた女の子の人

差し指に飛びついた。

「きゃっ！」

女の子が驚いて短い悲鳴をあげ、ドアの中に入れた指を引っ込めた。思わず手を離してしまった彼は女の子の指から転げ落ちる。二、三回くるくると後転したあと、開かれたドアへと向かって駆け出した。ドアをくぐり抜けた先で、彼よりも大きな女の子と更に大きな女の人が、小さなおもちゃの家のドアから出てきた小さな彼を見ていた。その目は驚き、見開かれている。

「怖がることはないよ！　ずっとここにいたんだ！　一緒に遊びたいんだ！」

女の子に向かって手を広げてそう言う。彼が口を開く度にお母さんが小さな悲鳴をあげた。お母さんの大きな瞳には涙がたまっている。

「あ、あなた！　ネズミ！　ネズミよ！」

そう言って女の子のお母さんは、彼の声などまったく聞こえないかのように慌てて部屋を出ていく。彼はびっくりして女の子に目を向けた。女の子はまだ彼を見たまま動かない。

「どうしたの？　ボクは何もしないよ！　一緒に遊ぼう！」

彼は笑って、さっきよりも大きな声で女の子に話しかけた。女の子は人形を握ったまま、少しずつ近づいてくる。近づいてくる女の子は、いつも窓から見ている女の子よりもずっと大きかった。

「ネズミさんどこから来たの？　おうち？」

女の子が話しかけてくれたことで、彼は嬉しくなった。

「ボクはずっと遠くから来たんだ。でも今はこの家がボクの家だよ」

「ジェニファーのおうち？」

「ジェニファーの家だけど、ボクの家でもあるよ」

そこから彼は胸を張って、この家に来た時のこと、女の子を見つけた時のことを、小さな手をいっぱい使って女の子に話した。女の子は人形を握りしめたまま彼の話を聞いていた。

「あのねネズミさん、今ママがクッキーを焼いてくれたの。これからジェニファーのお誕生日パーティーなのよ。ネズミさんも一緒に食べましょう？　今持ってきてあげるわ！」

そう言うと女の子は人形を置いて、部屋から駆け出して行ってしまった。女の子がかけていった方からは、おいしそうな匂いがしてくる。彼はお母さんが戻ってきてもいいように、もう一度家の中へと入っていった。

しばらく彼が家の中で待っていると、女の子が小さな白いお皿を持って部屋に入ってきた。白いお皿からはほかほかと湯気がたっている。彼は家のドアを開け、家の中から出てきた。彼を見た女の子の目が輝く。

「ネズミさん、クッキー持ってきたよ。はい、どうぞ」

女の子がしゃがんで、持っていた白いお皿を床に置いた。お皿の上には、彼にとっては大きなクッキーが三枚並んでいた。その内の一枚を、女の子が手渡してくる。彼は女の子の手からクッキーを受け取ると、かじりついた。口の中に甘いクッキーの味と香りが広がっていく。

「おいしいよ！　ありがとう！」

「どういたしまして。これでもう私たち、秘密のお友だちね！」

「秘密のお友だち……なんて素敵なんだ！」

女の子の笑顔に、彼もつられて笑った。

秘密のお友だちになった彼と女の子は、ジェニファーのお誕生日パーティーを楽しんだ。

蛍光灯に寄る蛍

僕の周りに来るやつらが皆僕ではなく、僕の父さんと近づきたいだけなんだって気づくのに、この歳になってからそう時間はかからなかった。あんなやつらなんて、コンビニの蛍光灯に寄ってくる蛾やカメムシのようだ。小さい時はおじさんやおばさん、知らないお兄さんやお姉さんが家に来て僕に話しかけてくれたり、遊んでくれたりしてとても楽しいと感じていたが、あの頃より成長した今となっては、その様子を一步引いたところから見るようになった。今日も厚化粧のお姉さんが僕に話しかけてきた。声がした方を振り返る。服も他の人より肌が出ていた。真っ黒い目から伸びている不自然な睫毛も、見ていてあまり良いものだとは思えなかった。

「ねえ彰君、今日は学校に行かないの？」

鼻にかかった甘ったるい声で、お姉さんが僕のことを呼び止める。鼻から息を吸えば、むせ返るような香水の臭いが肺に入ってくる。僕にはそのお姉さんが、人間ではないとても気持ち悪い生き物に見えた。

「行かない」

僕は早口にそう答え、背を向けて歩き出す。後ろの方でお姉さんが何か言っているが気にしない。気持ち悪い生き物となんか話したくなかった。早く自分の部屋にこもりたい。

家の廊下を曲がったところで、反対側から歩いてきたおじさんとぶつかりそうになった。僕に驚いたようで、おじさんはおととと、と言って、大げさに僕を避ける仕草をした。僕を見るおじさんの顔はこれ以上ない程の笑顔で、僕は見ていて不快感を覚える。

「すまないなあ彰君。怪我はしてないかい？」

脂ののって毛が生えた太く汚い手が僕に触ろうと差し出される。手からはタバコの臭いがした。僕はその手を無視して、おじさんの隣を通った。話すのも嫌だった。しかしおじさんもなかなか離してくれようとはせず、僕の服を引っ張って引き止めた。

「まあまあそう急がなくても。おじさんと少しお話ししないかい？」

「急いでるんで」

お姉さんの時と同じように早口でそう言い、おじさんが引っ張っていた服を無理矢理引っ張って、僕は早足でおじさんの元から離れた。あのおじさんは僕の父さんよりも僕と話をしたいたようだが、僕を見る目がいつも気持ち悪い。僕が目じゃなくて、僕の足とか腰をじろじろと見てくる。そう気づいたのは小学校六年生の時だった。流石に違和感を覚えて、思い切って他の人に聞いてみた。母さんに聞いてもあまり詳しくは教えてくれなかったが、父さんに近づきたいと思っているやつらの言うことには、どうやらあのおじさんは小さな子どもが好きらしかった。それ以来僕はあのおじさんに自分から近づこうとは思わなくなった。

あの人もこの人も皆気持ち悪い。自分の欲を隠しているつもりかもしれないが、僕にははっきりと見える。皆自分の欲を満たしたいだけなんだ。誰一人として純粋に僕と話をしたり遊んだりしてくれる人はいないんだ。そう考えると悔しくもあり、少し寂しい。小さい時はそんなことまったく考えずに笑って楽しく遊んでいたのに、皆欲だらけなんだと気づいてからはあまり笑えなくなった。

自分の部屋のドアを開け、中から鍵をかける。今頃なら学校に行って授業を受けていなければならない時間だが、自分の部屋にこもっている方が好きだった。学校にいるやつらも口を開けば父さんのことばかりで、僕のことを父さんの息子としか見てくれない。そんな場所においても何も面白くないし、話したくもない。

机の前に立って、ノートパソコンの電源を入れる。パソコンが起動する音が聞こえ、液晶画面が明るくなった。パソコンが完全に立ち上がるまでの間、椅子に座ってケータイを開く。いつものネットゲームのメルマガと一緒に、同じクラスの女子からメールが着ていた。このところ連日着ている。最初の方こそ開いて読んでいたものの、最近は開いても読まずにそのままにしてある。書き方は違うが、内容はほとんど同じだったからだ。書かれているのはその日受けた授業のことや、部活動のこと、クラスで起こったできごとなどと一緒に、悩みがあるなら聞いてあげるだとか、学校に来てほしいというものだ。引きこもりになった少年少女に対する典型的な文章で、自分がまるで正義の味方にでもなったかのように上から目線で語りかけてくる。言いたいことも上手く言えずあまり学校へ行かなくなってしまったような少女になら効果的だろうが、僕は違う。僕は自ら進んで引きこもったんだ。僕のことを父さんの息子としか見ていないやつらとなんか話したくない。顔を見るのも嫌だ。

僕はいつも通りメールを開いて未読通知を消し、そのままケータイを閉じた。ちょうどよくパソコンも立ち上がっている。今日はレベル上げと、五面のボスを倒しに行こう。

薄暗い部屋で、パソコンの横に置いたケータイが光った。メールのようだ。ヘッドホンを外して首にかけ、ケータイを開いて確認する。さっきメールを送ってきたクラスの女子だった。今までは一日に一通だったというのに、今日から二通送るようになったのだろうか。メールを開いてみると、さっき送られてきたものよりも短く、今から家に行くというような内容が書かれていた。

「は？」

一瞬何が何だかよくわからなくてももう一度読み返そうとした時、部屋のドアがこんこん、とノックされた。

「誰」

「彰、あなたにお客さんが来てるわよ。明美ちゃんって子。お友だち？」

「……今行く」

ドアの向こうにいる母さんにそう言って椅子から立ち上がる。パソコンをスリープモードにして、部屋の鍵を外してドアを開けると、ドアの前には母さんが立っていた。

「珍しいわね、お父さんじゃなくてあなたを訪ねてくる人なんて」

そう言う母さんに何も言わず、僕は母さんの前を通過して玄関まで行く。後ろから、ちゃんと挨拶するのよ、という母さんの声が聞こえてくる。僕は小さく返事をして、廊下を曲がった。

玄関に着くと、女子が一人、玄関の真ん中で突っ立っていた。僕を見つけた女子が、僕の方に寄ってくる。

「こんにちは、彰君」

「……ああ」

「調子はどう？」

「別に普通」

「そっか」

そこまで話して、また静かになった。メールをよく読んでいないから、こいつが何をしに僕の家に来たのかがわからない。持っているものを見る限りでは学校が終わってからそのまま来たようだが……

「で？」

「え？」

「僕の家までわざわざ来たってことは、何か目的があるんだろ」

「あ、うん……えっとね」

そう言うと女子は自分が背負っていた鞆を降ろして、中をあさり始めた。鞆の中からは紙がこすれる音がする。

「あ、あった。はいこれ」

手渡されたのは、大量の紙だった。真っ白い綺麗な紙から、失敗したコピーの裏紙に印刷されたものもある。

「休んでる間に渡されたプリント。流石に机の中にずっと入れておくわけにいかないし、もう机の中に収まりきらないから先生が持ってってやれって」

受け取って数枚見てみると、学級通信や教科ごとの問題がプリントされたものだった。

「もうずいぶん進んじゃったんだよ。学校来なくても大丈夫なの？」

そう言う女子には何も言わず、僕はプリントを眺める。正直に言うと、流石にずっと学校に行っていないだけあって、わからない内容のものがほとんどだった。基礎部分がかかれていたものを読めば理解できるだろうか。

「メールでも書いたけど、何か悩みがあるなら私が話を聞いてあげるから」

ただ。また僕の話聞いて“あげる”なんだ。やっぱりこいつも僕のことをかわいそうなやつとしか見てないんだ。そんなに僕の上に立ちたいのかこいつは。そう思うと目の前のこいつが腹立たしくなって、僕は舌打ちした。

「お前もどうせ僕のことをかわいそうなやつだと思ってんだろ。僕を僕として見てないんだろ」

「え……な、何言ってるの？」

勢いに任せて、言わなくてもいいことまで言ってしまった。しかし一度開いた口は、どうしてか止まらない。

「ここに来るやつらも学校のやつらも皆そうだ。皆僕を僕の父さんの息子としか見てない。皆父さんの金が目当てなんだ。お前もそうなんだろ？」

「ちょ、ちょっと、彰君！ 私はそんな——」

「うるさい！」

目の前のこいつの声が僕を否定しているように感じて、僕は思わず怒鳴った。また静かになる。僕もこいつも、何もしゃべらずにじっとお互いの足下を見ていた。

しばらくして、鼻をすする音がして顔を上げた。目の前で、プリントを届けにきた女子が、声を押し殺して泣いている。それを見て流石に少し後悔した。謝らなくちゃ。そう思って僕が口を開くよりも先に、女子が口を開いた。

「……ごめ、んなさ、い」

しゃくりあげながらそう言うと、女子は降ろしていた鞆を背負い直し、僕に背を向けて家を出て行ってしまった。鞆の中身が揺れる音と一緒に、走って行く足音も次第に遠ざかっていく。

「あ……」

声をかけようとした僕の手から、さっき渡されたプリントが滑り落ちた。支えを失った紙の束が、ひらひらと舞って玄関に散らばる。足下に散らばったプリントよりも、手で顔を覆いながら走り去っていく女子の姿から、僕は目が離せなかった。後ろから母さんの声が聞こえたけれど、何を言っているかまでは聞き取れなかった。もしかしたら僕のことを本当に心配してくれたのかと思った時には、もう既に遅かったのだ。

花束を君に

六月十六日。木下隼人が彼女の誕生日を思い出したのは、暑くなってきた昼の太陽に照らされつつ、駅前にある小さな花屋の前をちょうど通り過ぎようとした時のことだった。少し強めの風に乗って、花屋の匂いが木下の鼻にまで届く。何の花の匂いなのかはわからなかったが、花のいい匂いが木下の肺いっぱい広がった。黒い手提げ鞆の中に入っていた小さな手帳を取り出し、ゆっくり歩きながらパラパラとめくっていく。指でなぞりながら六月十九日のところを見ると、赤い字で『紗香、誕生日』と書かれていた。

木下の頭の中に、水色の細いフレームのメガネをかけた、黒髪ショートのふんわりした雰囲気の子—紗香の笑った顔が思い浮かぶ。最近用事が立て込んでいて忙しかったため、誕生日プレゼントの準備どころか、誕生日のことすらも忘れていた。この前ちょっとしたことで大喧嘩もしてしまったし、詫びを入れる意味でも何か紗香にプレゼントしなくては。

以前やたらとケーキやバッグの話ばかりしていたのは、そういうことだったのか、と思いながら、木下は紗香への誕生日プレゼントを何にしようか考える。紗香は決してこれが欲しいとは言わなかったが、今流行っているものはこういうもので、こういう色が好きだとか、どこそこのお店のケーキがとてもおいしくて評判がいいんだとか言っていた。紗香からの要求にもっと早く気づくべきだったかと思いつつ、木下は手帳を見ている内に通り過ぎた花屋を振り返る。両隣に建っている大型コーヒーメーカーのチェーン店とファーストフードのチェーン店に今にも押しつぶされてしまいそうなほどのその花屋の店先には、何種類かの花と一緒に、綺麗な字で『はなみずき』と書かれた看板が置かれていた。店こそ小さいものの、赤、黄色、紫などの色とりどりの花が店先に並んでいる。花にはあまり詳しくない木下だったが、種類はそれほど少なくはなさそうだとこのくらいは見てとれた。ケーキでもバッグでもないが、花でも女性を喜ばせるには十分だろう。

道行く人たちは、花屋をじっと見てぶつぶつと独り言を呟き続ける無表情の男を不審な目で見えてきたが、木下はそんなことはお構いなしに、花屋へと真っ直ぐ歩いた。

花に寄ってきている蜂や蝶を見ながら店内に入ると、一人の若い女性が木下に声をかけた。女性のかけている紺色のエプロンには、店先の看板と同じ字体で『はなみずき』と書かれている。どうやらこの店の店員のようだ。

「すみません、小さめの花束を一つお願いしたいのですが」

「花束ですね、ありがとうございます。どのようにいたしましょうか」

どうするか聞かれて、木下は少し黙ってしまった。あらかじめ決めていたなら好きな花を聞いてくることもできただろうが、ついさっきプレゼントを花束にしようと思いついた木下にはそれができなかった。

「花のことはよくわからないので……お任せできますか？」

「かしこまりました。プレゼント用でしたらメッセージカードもお作りできますが、いかがいたしますか？」

木下は、よく子供の習い事の発表会などに用意されているメッセージカード入りの花束を思い出す。メッセージカードを入れた方が喜ぶのかもしれないが、そのカードに入れる言葉を店員に

伝えるのもなんだか照れくさい。いざとなれば自分で言うこともできるだろうし、今回はいいだろうと思い、木下は断ることにした。手を軽く降りながら断ると、店員はにっこりと笑って頷いた。

「かしこまりました。ではできあがるまで少々お待ちください」

そう言うと店員は花束を作る準備をし始めた。

どのくらいかかるのかわからないが、おそらく五分か十分くらいだろうと考え、木下は花屋に並んでいる花を見ていることにした。と言っても木下には色が違うくらいしかわからず、どの花も形や匂いなどで区別をつけることは難しかった。知っていたのは百合の花くらいだ。

「彼女さんにプレゼントですか？」

花束を作りながら、店員が木下に笑って話しかける。木下は少し照れながら、ええ、まあ、と言って頷いた。

「いいですね、きっと彼女さん喜ぶますよ。何かお祝い事でも？」

「ええ、もうすぐ彼女の誕生日なので」

「誕生日ですか、でしたら誕生花も一緒に花束にお入れいたしましょうか？」

店員が言った誕生花という言葉に聞き覚えがなかった木下の頭に、二、三個のクエスチョンマークが浮かんだ。

「たんじょうか、ですか？」

「はい。その人の生まれた日のお花というのがありまして、いろんなものがあるんですよ。彼女さんのお誕生日を教えていただければ入れることもできますが、いかがいたしましょう」

木下は誕生花というものがよくわからなかったが、きっと入れれば紗香が喜ぶだろうと思い、店員にお願いすることにした。

「じゃあ、お願いします。六月十九日って何の花なんですか？」

「六月十九日ですか？ 少々お待ちください」

店員がレジの下から黄色の分厚いファイルを取り出して調べ始める。ファイルには花の名前と写真がたくさん書かれていた。何枚かページをめくると、六月と書かれた項目にたどり着いた。十九日、十九日、と呟きながら店員が指でファイルをなぞりつつ探す。十九日の欄に指が止まった時、店員が木下の顔を見た。

「あ、ちょうどいいですね、バラの花です」

そう言って店員がにっこりと笑う。バラの花なら木下にもわかった。花言葉などの詳しいことまでは知らなかったが、まったく知らない花の名前を出されるよりはイメージしやすい。紗香も普段バラと思われる花をモチーフにしたアクセサリーを身につけていたし、嫌いというわけではないだろう。

「では、こちらのバラの花も一緒に入れさせていただきますね」

そう言う店員の手には、店内に飾られていた赤いバラの花が数本握られていた。一つ一つの花はそれほど大きくはないが、どれも色がとても鮮やかでみずみずしく、何より美しかった。花びらの上に少しだけ乗った水滴が、店内の照明の光を受けてキラキラと輝いている。

「バラの花って、色や種類によって花言葉が違うんですよ。ご存知ですか？」

店員が花束を作りながら話す。木下が驚いて、そうなんですか？ と聞き返すと、店員は笑いながら頷いた。

「ええ、以前ここでバラの花を買っていった方も驚いていらっしゃいましたよ。バラの花言葉はたくさんあって、色や種類はもちろん、大きさの違いやつぼみや葉の状態でも花言葉というのは存在するんです。この赤いバラの『愛』とか『情熱』って花言葉が有名ですね」

「愛と情熱、ですか……なんか、ストレートっていうか……恥ずかしいですね」

「そんなことないですよ、素敵だと思います」

店員にそう言われたが、やはり木下はどこか恥ずかしかった。ドラマや漫画でよくある、好きな人にバラの花を送るシチュエーションを思い出し、木下の頬に少し熱がこもる。照れ隠しに店員から顔を背けて、横に並べられていた花を見るふりをした。そんな木下を見て店員は笑う。話題を変えるために言った、綺麗な花ですね、という短い言葉もどもってしまい、更に店員を笑わせることになった。木下を見て笑った後、店員は笑いながら再び花束作りに取りかかった。

数分経って、店員が花を見ていた木下を呼んだ。その手には、綺麗な赤い花束が抱えられていた。バラの他にも白や黄色のかわいらしい花が入った、少し小さめの花束だった。

「このような感じになりましたが、よろしいでしょうか」

「ええ、すごく綺麗で……ありがとうございます。きっと彼女も喜ぶますよ」

木下が笑ってお礼を言うと、店員は嬉しそうに笑って頷いた。

作ってもらった花束の代金を払い、花束を受け取って店を出た。木下の背後から、またお越し下さいませ！ という先ほどの店員の明るい声が聞こえてくる。

店員から受け取った花束を見ると、自然と笑顔になった。新しいおもちゃをもらった子供のような気分になった木下は、早く紗香を驚かせたくて、足早に紗香の家へと向かった。

花屋から少し離れた場所にある紗香の家に着いた木下は、すぐにドアの前に立って玄関についているインターホンを押した。ピンポンという音が聞こえてからしばらく待つ。

「……」

すぐに出てきてくれると思っていた木下は、なかなか出てこない紗香を疑問に思いながら、もう一度インターホンを押した。紗香の家にインターホンの音が鳴る。音が鳴ってしばらくしても、やはり紗香は出てこなかった。どうやら留守のようだ。買い物にでもでかけているのかと思いつつ腕時計を見ると、いつもなら自分も買い物にでかけているくらいの時間だった。

手に抱えた花束を見て少し残念に思いながら、渡すのは明日にしようかと諦めてドアに背を向けた時、家の中から何かを床に落としたような物音が聞こえた。木下は気のせいだろうかと思ったが、しばらくしてまた違う物音が聞こえる。

もしや紗香の家に泥棒が入ったのではないかという不安に襲われた木下は、右手で玄関のドアノブに手をかける。ドアは簡単に開いた。鍵はかかっていなかったようだ。こじ開けられた様子はないようだが、紗香が出かける時に鍵をかけ忘れたのか、それとも何者かによって開けられたのかはわからない。

木下は静かにドアを開け、紗香の家の中に入る。本人に言わずに入るのも気が引けたが、本当

に泥棒だったら大変だ。

玄関には紗香の靴がいくつか置かれていた。ショートブーツやグラディエーターサンダル、スニーカーなどが並べられていたが、そこにはいつも紗香が履いている薄いピンク色のパンプスも置かれている。なくなっている靴はないようで、紗香がどこかにでかけたというわけでもないようだ。

「紗香、いるならインターホンに出てくれよ……上がるぞ」

木下が家にいるはずの紗香にそう言うが、返事は返ってこなかった。靴を脱いで家に上がる。脱いだ靴を揃えて体を起こそうとした時、木下は紗香のスニーカーの陰に何か落ちていていることに気づいた。なんだろうと思って右手を伸ばし、紗香のスニーカーを少しずらして確認する。ちょうど左足の踵部分に、少し汚れた青い百円ライターが落ちていた。何回か使ったもののようで、中身が半分くらいまで減っている。

手にしたライターを何度か裏返したり戻したりしながら、木下は不思議に思った。紗香が喫煙者だということは一度も聞いたことがなかった。隠れて吸っているのだろうかとも考えたが、紗香の家——少なくとも玄関からは、たばこの臭いはしてこない。木下が左手に持っているバラの匂いがするだけだった。

紗香に隠し事をされているのではないか。そういう考えが木下の頭をよぎった。ライターと花束を持ったまま家の中を見る。冷蔵庫の動くぶーンという音と、時計の秒針が進むカチツカチツという音以外は聞こえない。静かだった。

「……紗香？」

木下がもう一度呼びかけてみるが、やはり紗香からの返事はなかった。靴があるのだから家のどこかにはいるだろうと思い、木下は廊下を進む。静かな紗香の家の中に、バラの香りが少しずつ広がっていく。

廊下を歩きながら木下が耳を澄ましてみると、少し高めの話し声が聞こえた。きっと紗香だろう。泥棒じゃないことに安堵して、声が聞こえた紗香の部屋に近づいていく。近づくにつれて、声ははっきりと聞こえるようになってきた。どうやら電話で誰かと話しているらしく、話し声は一人分だけだった。

「……でさ、そしたらそいつ怒っちゃって。そん時の顔すごくてさー」

紗香の部屋の少し前まで来て、木下は思わず立ち止まった。部屋の中から聞こえる声は聞き覚えのあるはずなのに、話し方がいつもの紗香の話し方ではない。木下の知っている紗香はもっとゆっくりとした穏やかな話し方で、今聞こえてきているような大声でゲラゲラ笑うような話し方ではない。何が何だかわからずにいる木下の耳に、次から次へと紗香のゲラゲラと笑う声が響いてきた。

「そうそう、だからさー、今のもそろそろ限界かなって……うんうん」

紗香はまだ電話で話していた。

混乱した頭のまま、木下は紗香の部屋の前で突っ立っていた。この部屋にいるのは、本当に紗香なのだろうか。この部屋には紗香ではなく、紗香の声に似た誰かがいるのではないか。もしかしたら自分が道を間違えて、関係ない人の家に入ってしまったのではないか……考えれば考える

ほど、よくわからなくなってくる。

何が何だかよくわからないまま、木下は部屋のドアノブを回す。そのままドアを開けて中に入ると、携帯電話を片手に化粧をしている紗香の姿があった。だがそこにいた紗香は木下が知っている大人しい紗香ではなく、黒かった髪は金髪に、かけていたメガネはコンタクトに、着ている服も地味なものから派手なものへと変わっていた。綺麗に片付いていたはずの紗香の部屋も、様々な種類の新しい靴やバッグで散らかっている。その中には木下がプレゼントしたのものもあったが、身に覚えのないものの方が多かった。紗香は突然入ってきた木下を見て一瞬固まる。

「……誰？」

驚いたまま立っている木下がやっと言葉を吐いた。力が抜けた木下の右手からライターが滑って床に落ち、乾いた音を立てる。紗香は木下の言葉には答えずに、今まで話していた相手に断ってから携帯電話を切った。

「なあ、誰なんだよ……紗香なのか？」

木下がもう一度言うと、紗香はいかにも面倒くさそうな顔をしてはあ、とため息を一つついて頭をかいてから、ぱっと顔を上げて木下を見た。

「誰って、あたしだよ一隼人君、紗香一」

そう言って笑う紗香は、木下がよく知っている紗香だった。面倒くさそうな力の抜けた顔は一変し、睨みつけるような目がぱっちりとかかれ、半開きだった口はきゅっと引き締まっている。話し方も先ほどのような鋭い口調のゲラゲラという下品な笑い方ではなく、ゆっくりとした、ふんわりしている柔らかい笑い方だ。木下はますますわけがわからなくなった。

「俺、よくわかんないんだけど……本当に紗香？」

「……あたしだって言ってんじゃない。それとも何？ あんたに会ってる時の紗香だけがあたしだと思ってたの？」

紗香の顔と口調がまた変わる。引き締まった顔から再び力が抜け、口調もゆっくりとした口調から、先ほどまで携帯電話で話していた時の鋭い口調になっていた。高圧的な態度をとられ、木下は紗香を睨みつける。

「だいたい何で今ここにいるわけ？ 来る時は連絡してって言ったよね？ あたしこれからでかけるんだけど」

「……なんでインターホンに出てくれなかったんだ。このライターは何だ。この靴とかバッグは？」

足下に落ちたライターを指差しながら紗香を見て言うが、紗香は怯みもせず、面倒くさそうに木下を見ている。

「インターホンに出なかったのは化粧してたから。そのライターはこの前遊びに来たやつのお忘れ物、この靴とバッグはこの前新しく買ったの。これでいい？」

そう言うと紗香は止めていた手を動かして、化粧の続きをし始めた。鏡を見ながらアイラインをひいている。その余裕な態度に、木下は徐々に腹が立ってきた。

「……俺を騙したのか」

木下が下を向いてぼつりと言う。納得がいかず怒りで手に力を込めれば、左手に握っていた花

束の持ち手がクシャッと音を立てて潰れた。そんな木下を、紗香は化粧をしながら鼻で笑う。

「騙したって、何が？」

「お前は紗香じゃない」

「……何言ってるの？ あたしは紗香だし、あんたと会ってた時のあたしも紗香。あんたが勝手に、あれだけがあたしだって思い込んでただけでしょ？」

紗香がマスカラを塗りながらそう言うが、木下の耳にはほとんど入ってこなかった。花束を持つ手に更に力がこもり、ぽきっという、バラの茎が折れる音がする。

「はあ……あんたとはそろそろ終わらせようと思ってたからちょうど良かったわ。欲しかったものも結構買ってもらったし、そもそもあんたそんなにタイプじゃなかったし、もういいかなーって」

マスカラをつけ終えた紗香は、今度は派手な赤いつけ爪をつけ始めた。ただ部屋の入り口に突っ立っているだけの木下の心に、紗香の言葉一つ一つが突き刺さっていく。

「じゃあ、なんで、俺と……」

「欲しいものがあったの。どうしようかって思ってた時にあんたから好きだって言われて、ちょうどいいからつき合っちゃうかーって思った。買ってもらうために演技するの大変だったんだから」

あん時のあんたの顔最高だったわ、と言いながら、紗香は笑って手を叩いた。木下はもう何も言うことができなかった。うつむいたまま、唇を噛んでいる。

「そういやその手に持ってる花束何？ もしかしてあたしの誕生日プレゼント？ あたしバッグ欲しいって言ったよね、今流行ってるかわいいやつ。花とかどうしようもないし、放っとくとそのうち枯れちゃうし、正直いらないんだよね」

紗香はひとしきり手を叩いて笑った後、木下を睨みつける。

「わかったら早く出てってくんない？ さっきも言ったけどあたしこれからでかけるの。そのライターの彼とね」

床に置いていた紗香の携帯が鳴る。紗香が携帯に出て、すぐに大声で話し始めた。その声はやはり鋭い口調の紗香で、柔らかい口調の紗香ではなかった。紗香は木下のことなどまるでそこにはいないかのように、本人がいる前で、話し相手に木下の話をして笑っている。

その場にいるのが辛くなった木下は、紗香に渡すはずだった花束を強く握りしめたまま、紗香に背を向けて階段をかけ下りていった。背後から紗香の大笑いが聞こえた。

「……はあ」

紗香の家から出てきた後、木下は近くの大きな橋から、ごうごうと流れる川を見てため息ばかりをついていた。今朝降った雨のせいで水は濁り、川は水かさが増して、いつもより勢いがついている。左手に握ったままの花束は、買ったときよりも少し萎れているようだった。バラの花も茎が折れて、花びらが何枚か散ってしまっているものがある。花束を見ているとさっきの紗香の顔が頭に浮かんできて、無性に腹が立った。派手な服、散らかる部屋、笑い声……思い出したくないものが、全て頭の中に浮かんでくる。

木下は握った花束に更に力を込め、そのまま川へ向かって思いっきり投げた。近くにいた鳥や

虫に当たりそうになりながら何回かくるくと回った後、クシャクシャになった花束が、ごうごうと音を立てて流れる汚い川にのまれていく。最初は浮いていたが、赤いバラは泥水に何度か浮き沈みした後、すぐに見えなくなってしまった。

俺も今ここから飛び込めば、あんな感じに……そう思って橋に手をかける。だが、それだけだった。手と足が震えている。木下には、川に飛び込むだけの勇気がなかった。

紗香に言われるだけ言われて言い返せず、死ぬことすらできない自分が情けなくなってきて、木下はそのまましゃがみ込んでため息をついた。紗香は今頃どうしてるだろうか。まだ俺のことを他のやつに話して笑っているのだろうか。もうあのライターの持ち主と一緒にどこかへ行っているのだろうか……考えれば考えるほど嫌になっていく。しかし紗香のことをどこかまだ諦めきれていない自分がいることに気づき、木下は自分を鼻で笑った。

「……タバコでも吸うか」

笑いながら小さく呟いた木下の声は、近くを通った車の走行音にかき消された。

再恋愛

お久しぶりです。背後からそう声をかけられて振り返ると、移動していく人の中で、一人の女性がこちらを見て立っていた。大きくて黒い目、茶色くて軽くウェーブのかかったいい匂いのする長い髪印象的で、目立たない胸が少し残念だが、足が細くてかわいらしい女性だ。久しぶりと言うのだからきっとどこかで会っているのだろうけれど、この女性が誰なのか、僕にはわからなかった。

「あ、えっと……すみません、失礼ですが、どちら様で？」

そう言いながら、僕は懸命に自分の記憶を辿ってみる。学校関係、バイト先、よく行く店、地元、友達の彼女……とにかく思い当たりそうなところを思い出してみる。しかしいくら思い出そうとしても、目の前の女性と同じ人物は思い当たらなかった。

僕が思い出そうとしていると、女性はちょっと驚いた後、そうですね、と言ってくすっと笑った。

「ちょっと、変わっちゃいましたからね。私、平山香です。先輩の一個下の……覚えてませんか？」

「ひらやま……」

平山香という名前には聞き覚えがあった。でもそれがどこで聞いたものだったかは思い出せない。少なくとも最近ではないはずだ。僕のことを先輩って呼ぶってことは、学校で会ったことがあるのだろうか。

「中学と高校一緒だったじゃないですか。酷いですよー」

「そ、そうだっけ。ごめんごめん」

そうは言うが、まだ思い出せない。たしかに名前は聞いたことがあるのに、このような女性と仲良くしていた記憶はない。この女性のことだけきれいさっぱり忘れていたというわけでもないだろうし……この女性には失礼かもしれないけど、よほど目立たない人物だったのかもしれない。

「同じ中学ってことは、A市出身なの？ よくこっちまで来たね」

今僕が住んでいるこの町は、僕の地元からは結構離れている。仲が良かった友達が地元の大学を選ぶ中、僕はどうしてもこの町にあった大学に入りたくて、一人でこっちまで来た。僕以外にこっちまで来た人はどうやらいなかったらしく、僕の先輩たちの中でも毎年一人行くか行かないかくらい人気がないようだ。そんな場所に女性一人で来るとするのは、なかなか勇気のある人だ。

「ここの大学に入りたくて来たんです。先生とか親も反対してたんですけど、どうしてもここじやなきゃいけないくて」

正直に言って、こっちよりも地元の大学の方が有名だし、毎年母校出身者が何人も入っているから人間関係も心配ないし、近いからお金もかからない。よほどの理由がなければ地元の大学を勧められるはずだ。僕の時もそうだった。それでもこっちに来たということは、やっぱり僕と同じように何かやりたいことがあるのだろう。

「でも、よく僕だってわかったね。僕って特に目立った特徴はないと思うけど」

「そんなのすぐわかりますよ！　だって先輩ですもん！」

「そ、そう？」

僕だから、というのはよくわからないけど、僕はそんなに特徴的な動きでもしていたのだろうか。いたって普通に歩いてたつもりなんだけど。

「ところで先輩、つい呼び止めちゃいましたけど、何か用事ありました？」

「いや、これから帰ろうと思ってたけど……なんで？」

「私、先輩と久しぶりに会えて嬉しくて……少しお話しませんか？　おすすめの喫茶店があるんです」

そう言って明るく笑う彼女は、まさしく女の子といった感じだった。このまま帰ってもご飯を食べて寝るだけだし、特に断る理由もない。せっかく声をかけてくれたのに断って彼女をがっかりさせるのも悪い気がするし、僕も彼女のことをしっかり思い出すために話をしてみたい。僕は彼女の誘いに、いいよと言って頷いた。

「ありがとうございます！　この近くなんですけど、そこのチーズケーキがすっごくおいしくて！」

そう言って僕の手を握る彼女はとても嬉しそうで、見た目よりも少し幼く感じた。僕は彼女に右手を握られたまま、彼女おすすめの喫茶店まで歩いて行くことになった。握った彼女の左手は細かったが、今まで見てきた女性の手よりは大きく骨張ってごつごつした手だと思った。

喫茶店に行くまでの道だけではなく、喫茶店に入ってから、彼女の話は尽きることがなかった。ほとんどが彼女からの話で、僕は彼女の話聞きつつも、よくそんなに話すことが思いつくなあと驚きながら、返事をしたり頷いたりしていた。そんな彼女の話が一段落した時に、思い切って彼女に尋ねてみた。

「あのさ、中学と高校が一緒だったって言ったけど、何部だった？　どうしても思い出せないんだ」

「えー、私そんなに印象なかったですかー？」

平山がチーズケーキにフォークを入れながら、困ったように笑って言った。

「う……ごめんって」

「まあ、私地味な方でしたからね。吹奏楽でクラリネット吹いてましたよ」

中学時代と高校時代の吹奏楽部を思い出してみる。中学も高校も、とにかく人数が多かったということしか覚えていない。クラリネットは……あのリコーダーを大きくしたやつのことだろうけど、それだって吹いている人はいっぱいいた。

「あ、でもクラリネット吹いてる人いっぱいいましたもんね。じゃあなんて言えばいいかな……うーん、その時の写メとかあれば一番いいんでしょうけど、この前全部消しちゃったんですよ」

そう言って平山は携帯を取り出し、何か残ってないかなーと言いながら操作し始めた。しかし見つけられなかったのか、しばらくして携帯を閉じて、持っていたバッグの中にしまった。

「やっぱり残ってなかったです」

「うーん、まあいいや。そのうち思い出すかもしれないし」

ここまで聞いても思い出せないとは思わなかった。地味な方だったと平山は言ったが、相当地味だったのではないだろうか。だとしたらかなりの変わりっぷりだ。私としてはすぐ思い出してほしいんですけどーと言ってチーズケーキを食べる今の彼女は、決して地味ではない。むしろ彼女の明るめの茶色い髪が目を引きくらいだ。高校卒業後から今までに何かあったのかとも思ったけど、僕に話してくれる内容からはそういうわけでもなさそうだし……女性にはこういうこともよくあるのだろうか。

「今だから言えますけど、私先輩のこと好きだったんですよ」

「ふーん……へ？」

コーヒーを飲もうとカップに伸ばした手を止めた。好きという言葉に、自然と心拍数が上がる。コーヒーカップから顔を上げると、平山が笑って僕を見ていた。

「でも先輩彼女いたんでしょ？ だから私諦めて、ずっと先輩のこと見つめるしかできなかったんですよ」

「そうだったんだ……それはいつ頃の話？」

「……中学の時からです」

「中学の時から？」

「それから先輩が卒業するまでずっと……」

そう言うと平山は手元に視線を落としたまま、口を閉じてしまった。

中学から僕の卒業までということは、最大でも六年間……ずいぶん長い間僕のことを好いてくれたんだなあと思うけれど、流石に長くないだろうか。小さい頃からお互いを知っていてずっと好きだった、というシチュエーションは漫画でよく見かけるが、そんなことが現実でそう簡単に起こるはずがないし、ましてや僕と平山は——平山は僕と会ったことがあると言っているけど——ほぼ初対面に近い。話したこともない一般的な男子学生に六年間もずっと片思いのままというのは、本人がそう言っているのだから本当のことなのかもしれないが、少し冗談のようにも聞こえる。

「ろ、六年って流石に長くない？ ははは……」

そう言って少し笑ってみせた。しかし笑っているのは僕だけで、平山は顔を下げたまま黙っている。店内に一瞬で気まずい空気が流れた。

「そ、そっか、六年も僕のこと……あ、ありがとね」

何を言っているかわからずにとりあえずお礼を言ってみたけれど、何の反応も返ってこなかった。今まで賑やかだった店内も、平山が黙ってしまったことにつられて、いつの間にか静かになっていた。他のテーブルに座っている人たちも口を開かずに、自分の目の前に置かれているカップやケーキに手をつけている。カチャカチャという食器の擦れる音しかない店内は、居心地が悪かった。何人かがこちらをチラチラと見てくるのがわかる。ウェイターさんですら、さっきよりも小さめの声で話をしている。

平山に話を振ろうにも、誰も口を開かないこの空間ではなんだか話しづらい。自然と僕の視線も下がり、自分の前に置かれているコーヒーカップに手を伸ばすか、トイレに行くことしかできなくなってしまった。しかしカップに入っているコーヒーも無限ではない。ついにはカップの中

身を飲み干してしまい、やる事がなくなってしまった。僕がコーヒーを飲んでいる間にも平山は動こうとはしなかった。平山の目の前に置かれた食べかけのチーズケーキは、あと一口というところで銀紙の上に力なく横たわったままだ。

どうしようかと悩んだまま数十分が過ぎた時、僕の携帯が鳴り出した。静かだった店内に、僕の携帯の着信音が鳴り響く。いきなり破られた沈黙に、僕を含む数人がびっくりして肩を震わせた。ポケットから携帯を取り出して見てみると、大学の友達からだった。うつむいたまま動かない平山に一応断りを入れ、まだ少し驚きで落ち着かないまま、通話ボタンを押して携帯を耳にあてた。

「も、もしもし？」

『あ、浅野？ 俺だけど……今どこにいた？』

「喫茶店だけど、何か用？」

そう言いながら平山に目を向ける。まだ顔を下げたままだった。よく見ると口が少し動いているようだけど、何を言っているのかは聞こえなかった。

『あのさ、今から数人で集まって飲みに行くんだけど、お前来る？』

「今から？ どこで？」

携帯を耳にあてたまま、僕は店内に飾られている時計を見た。気がつけばもう五時半を過ぎていた。今から飲むのは少し早くないかと思ったけど、今この場から抜け出せる理由になるなら何でもよかった。

『駅前の居酒屋。一応六時からってことにしてるけど、どうする？』

「あー、じゃあ行くよ。ちょっと遅れると思うけど」

『わかった。じゃあ先に入って飲んでるわ。またなー』

通話を切って、携帯をポケットにしまう。行くと言ってしまったからには、平山に言ってから行かなくては。

「えっと、平山。ちょっと友達から連絡きたから、僕行くよ。まだいる？」

呼びかけても反応がなく、まだ口を少しだけ動かして何かをぼそぼそと呟いていた。どうしたらいいかわからずに、僕はとりあえず会計をすませることにした。平山の頼んだ分も一緒に払って、そのことを一応平山にも言ってから店を出た。窓から見えた彼女は、まだうつむいて座ったままだった。

「おー、浅野、こっちこっち」

駅前の居酒屋に入ると、座敷から見知った顔が出てきて手招きした。靴を脱いで座敷に上がると、皆それぞれが好きな酒を飲み始めていた。既にいくつか空のジョッキが並んでいる。僕は空いていた席に座った。

「遅かったじゃん！ 何してたの？ 彼女？」

そうやってきたのは、僕に電話をかけて沈黙を破ってくれた岡田だった。顔が赤くなり始めているのを見ると、あの並んでいた空ジョッキの内のいくつかは岡田が飲み干したものだだろう。

「いや、彼女じゃないんだけどさ、ちょっと面倒くさい人に捕まっちゃって」

「面倒くさい？ 何、セールスとか？」

「それより飲もうぜ浅野！ すいませーん！ ビールもう一つ！」

ビール片手に横から入ってきた川原が、店員を呼んでビールを注文する。おそらく僕の方だろう。声の大きさや顔の様子からして、川原も酔っているようだ。

「それがさ、僕を知ってるって言う人が話しかけてきたんだ」

僕はさっきまでのことを話した。別の話で盛り上がっていたはずの飲み仲間も、酒を飲みながら僕の話に耳を傾けている。

「えー、何それ……誰だかわかんねえから余計に怖いじゃん」

「しかも最後まで黙ってんのかよ。そりゃ逃げたくなるわ」

「だから岡田から電話かかってきてよかったよ。かかってこなかったらずっと無言のままだったかも」

「うわー、それきついわ。俺無理、耐えられないね……すいませーん！ ビールお願いしまーす！」

嫌そうな顔をした後、川原が店員にビールを頼んだ。

「お前のストーカーにならなきゃいいな、その女」

岡田の一言を聞いて、僕は身震いした。連絡先も家も平山には教えてはいないが、彼女ならやりかねないのではないかと。まさかそんなこととは思いつつも、僕のアパートの部屋の前でたたく彼女の姿が安易に想像できてしまう。

「……そう言われたら本気で怖くなってきた」

「わ、悪い……まあ、何かあったら言ってくれよ」

「そうそう、今は楽しく飲もうぜ？ かんぱーい！」

そう言ってビールジョッキを掲げた川原を見て、僕も同じように、運ばれてきたビールジョッキを受け取って、掲げて笑った。いつそ平山との記憶も酒で全部吹っ飛んでくれないだろうか。実は長い夢だったんじゃないか……そう思えばなんてなんて楽なんだろう。そう思いながら、僕は手に持ったジョッキを口へ運んだ。

平山からのメールがきていることに気づいたのは、日付が変わって飲み会が終わり、解散して家に帰った後だった。メール画面を見た瞬間、僕は固まった。僕は平山にメールアドレスを教えたことはない。こっちに来てから一度アドレスを変更した際に、よく連絡を取る人たちには新しいアドレスを教えたが、それ以外の人には教えていないはずだ。その内の誰かから聞いたとしても、他人のアドレスを勝手に教えるような人たちではない。

僕はおそろおそろ、件名に平山です。と書かれたメールを開いた。

中身は普通の内容だった。偶然だったけど、昨日出会えて嬉しかった、話ができて楽しかった、最後は黙ってしまっでごめんなさい、チーズケーキごちそうさまでした、先輩大好きです、というようなことが、動くハートや笑顔の絵文字と一緒に書かれている。どうやって僕のアドレスを知ったのかについては一切触れられていない。

岡田たちに相談しようかと思ったけれど、きっと皆は今頃家で寝ているだろう。メールや電話

をしても起きないのではないか。

怖かったけれど、僕は彼女がどうやって僕のアドレスを知ったのかが気になって、どうやって僕のアドレスにメールを送ってきたのかをメールに書いて送った。電話番号を知られていないだけまだいいだろう。メールアドレスなら何度も変更することができるし、変更した後は彼女に教えなければいい。

数分としない内に、僕の携帯がメールを受信した。平山からだ。僕はメールを開いた。

「は？」

メールに書かれていた内容を読んで、思わず声が出てしまった。そこには、SNSに載っていたと書かれていた。僕は急いでパソコンを立ち上げ、いつも使っている何種類かのSNSサイトにアクセスして、自分のプロフィールを確認する。その内の一つに、ほぼ初期設定のままのものが一つあった。そこには僕がサイトに登録したときのメールアドレスが記載されていた。しかしそれでも公開はそのサイトの中で友達になった人のみであり、その中でも僕が許可した人以外の人は見るできないようになっている。アドレスの閲覧を許可した人のリストを見ても、平山と思しき人物はいなかった。しかし知ることができるとすればここしかないだろう。僕は急いでそのサイトに記載されていたアドレスを非公開にして、どうやって知ったのかはわからないけど、こういう困ったことは止めてくれといった内容のメールを平山に送り、すぐにアドレスを変更した。昨日一緒に飲み会をしたメンバーや、他にもよく連絡を取り合う人にもアドレス変更を知らせるメールを送る。

携帯を閉じて一息ついてから、僕はまたパソコンの画面を見た。数えきれない人がいるネットの世界で、平山はどうやって僕を探し当てたのだろう。僕は複数のSNSサイトに登録しているけれど、いずれも本名で登録するようなバカな真似はしていないし、それぞれ名乗っているハンドルネームも違う。極力個人が特定されないような使い方をしているつもりだ。日頃更新する日記の内容も、誰にでもあるようなごく普通の内容だし、街の名前や風景の写真などは載せないようにしている。もちろん何が好きか、くらいの情報は載せているけれど、それだけで僕個人を特定することはかなり難しい。それなのに平山から送られてきたメールには、僕であるかどうかの確認は一切載っておらず、むしろ確実に僕のアドレスに送ったと確信している内容だった。

アドレスも変えたし、サイトのものは非公開にした。これでもう平山からメールが送られてくることはないだろう。そう思うと一気に力が抜けた。メールが送られてこないとわかっただけでもかなり安心できる。それでもまたいつか彼女に何かされるのではないかと思うと、一人で閉じこもっているのが怖く思えてきた。もう少ししたら、岡田か川原にでも連絡して相談してみよう。なるべく他の人には迷惑をかけたくないけれど、最悪誰かの家に避難することになるかもしれない……考え過ぎだろうか。

携帯が振動して、着信音が鳴る。僕は鳴っている携帯に目を向けた。まさかとは思いつつも、さっきのメールのことがまた浮かんでくる。もしや平山は僕の電話番号まで特定していたのだろうか。

携帯を手にとって開いてみる。画面には岡田の名前が表示されていた。岡田の名前を見て安心した。僕は通話ボタンを押して電話に出る。

「もしもし」

『浅野？ お前また何か言われたのか？』

携帯から岡田の声が聞こえる。酒を飲んでいた時のような上機嫌なものではなく、落ち着いた声だった。

「何かって……平山のこと？」

『そうそう。あの話された後にアド変メールきたからさ、もしかしたらって思って』

「……あのさ」

僕は平山から送られてきたメールのことを話した。送られてきた内容、そのメールに対する返事、平山がどうやって僕のアドレスを知ったのかを順番に説明する。岡田と話をしている間にも彼女がまた何かしてくるんじゃないかと思ったけれど、少なくとも電話がかかってくることはないと思うとまだ楽だ。

『SNSから特定されたってまじかよ……笑えねえ』

岡田の驚いた声が聞こえる。岡田もいくつかのSNSサイトに登録していると言っていたのを覚えている。今回のことがどれほどのことかは理解してくれただろう。

「SNSのアドレスは非公開にした。平山にも新しいアドレスはもちろん教えてないし、もうメールがくることはないと思う」

『怖いな……電話番号とか住所まで特定されなきゃいいけど、お前の話聞いてると本当に特定されそうだ』

「僕が一番怖いよ。でき、あまり考えたくないけど……もし本当に特定されそうになったら避難させて」

『わかった。ここで諦めてもらえればいいな……また何かあったら言えよ？』

岡田にお礼を言って、僕は通話を切った。携帯を閉じてパソコンの横に置き、設定を変えたSNSサイトを開く。

このサイトは面白い人が多く、サイトに行けばいつも誰かしらが僕に挨拶をしてくれていた。しかし今回のことがあった以上、またいつ平山のような人が出てくるかわからない。すごく名残惜しいけれど、僕はそのサイトから退会することにした。仲良くしてくれていた人たちにメッセージを送り、退会理由と今まで仲良くしてくれたお礼、そして今回のことについての注意点などを伝えた。今いない人もいるようだけど、退会后数日間はメッセージが残る設定になっていたはずだ。僕は全員にメッセージを送ったかどうか確認してから、SNSサイトの退会ボタンを押した。

SNSサイトを退会してから数日経った。結局一つのサイトを退会しただけじゃ不安は消えず、登録していたSNSサイト全部から退会した。サイトで仲良くしてくれていた人たちは寂しがってくれたけど、理由を話したら皆納得してくれた。騒動が一段落したらまた戻ってくると言ってしまったが、もう戻ることはないだろう。

あれ以来、平山からのメールは来なくなった。まあ、新しいアドレスを教えていないのだから、来ないのは当然と言えば当然なのだけれど。恐れていた電話番号や住所の特定はなく、偶然な

のか、平山に遭遇することもなかった。だから安心しきっていた。

「あ、先輩！」

背後から聞こえた聞き覚えのある声に、僕はつい足を止めて、そして後悔した。ここで足を止めずにそのまま歩いていたら無視もできただろうに。

僕は諦めて振り向いた。そこにはやはり、会いたくなかった平山がいた。平山が笑いながらこちらにかけよってくる。以前ならその笑顔も可愛いものだと思えたけれど、今となってはもうそうは思えない。

「メールでも言いましたけど、この前はごちそうさまでした。先輩とお話できて、私楽しかったです」

平山はまるで何もなかったかのようにそう言った。この前のことは反省していないようだ。むしろ悪いとすら思っていないのかもしれない。

にこにこ話す彼女の顔が、仮面に見えて仕方がない。

「あ、そうだ先輩。先輩メールアドレス変えました？ 何回メール送っても返ってきちゃうんですよー」

「うん、変えたよ」

「やっぱり！ なんで私に教えてくれないんですか。教えてくださいよ」

「悪いけど、平山には教えられない」

さも当然のように僕のメールアドレスを受け取ろうとしていた平山が、え？ と言って携帯から顔を上げた。

「この前平山が僕にメールを送ってきた時、僕はとても怖かったし、どうしてこんなことをしたのかわからなかった。平山は僕のことをよく知っているみたいだけど、僕は正直に言って何も思い出せない」

僕が平山にそう言う間に、最初は上がっていた平山の口角は徐々に下がっていった。携帯を握って胸の前に構えていた平山の右腕が静かに下ろされる。

「前日会ったばかりのほぼ初対面の人から、教えていないはずのアドレスにメールがきたら平山も怖いだろ？ だからもうこんなことは止めてくれ」

「初対面じゃ……前会って……」

「だから！ 僕は君を知らないんだ！」

道行く人が振り向き様にこちらを見てくる。いきなり僕が大声を出したのだから無理もない。

「先輩頭かどこか怪我しました？ もしかして記憶が飛んじゃってるとか？ 病院で診てもらった方がー」

「病院で診てもらった方がいいのは君の方だろう！ もう近寄らないでくれ！」

僕は平山の返事を聞かずに背を向けて早足で歩き出した。背後から僕を呼ぶ声が聞こえるけれど関係ない。平山から離れることだけを考えて、僕はどこに行くのかも考えずにひたすら歩き続けた。背後ばかりに集中していたから何度か人や電柱とぶつかりそうになった。

元々の目的だったスーパーにも寄らないで、僕は家の玄関を開けて中に入った。平山はどうして僕に嫌がらせをしてくるんだろう。いや、本人はそんなことまったく思っていないんだろうけれど。

持っていた荷物をそのままベッドの上に放り投げて、僕は電話をかけた。最初からこうした方

が早かったのに、どうして僕はこの方法を思いつかなかったのだろう。数回呼び出し音が鳴った後、電話にでる音が聞こえる。

『もしもし？ 久しぶりじゃん。どうしたの？』

電話の向こうから懐かしい声が聞こえた。地元の友達の吉崎だ。

「ああ、うん、久しぶり。ちょっと聞きたいことがあってさ」

『聞きたいこと？ 何？ 同窓会のこととか？』

「いや、そうじゃないんだけど……あのさ、平山って覚えてる？」

『平山？』

「うん、平山香っていう女の人」

吉崎は、ひらやま、と呟いた後、しばらく考え込んだ。やっぱり僕だけが忘れていているというわけではないのだろうか。

『うちの学年に女の子で平山っていたっけ？ 平川とか平野とかならいるけど』

「いや、僕のこと先輩って呼んでるから多分後輩」

『後輩？ 後輩で平山かあ……男の子にいなかったっけ？』

「ああ、そういえば……でも僕が会ったのは女の人なんだ」

『会った？ 人違いじゃない？』

「僕もそうじゃないかと思ったけど、相手が僕のことをすごく良く知ってるんだよ。同じ学校出身だって言うし」

『うーん、女の子で後輩で平山……ちょっと調べてみるよ。それで、その子がどうかしたの？』

「それが——」

僕が吉崎に詳細を話そうとした時、ピンポンという音が鳴った。誰か来たのだろうか。

「あ、ちよつとごめん。誰か来たみたいだから、またかけ直すよ」

『はい、じゃあね』

僕は携帯の電源を切った。電源を切った後に、またピンポンという音が鳴る。誰だろう。荷物が届くのはまだだったと思うけど。

僕は玄関を開けようとして、誰が来たのかをドアスコープから確認した。

立っている人物を見て、僕は固まった。ドアスコープを覗いた先には平山が立っていた。見間違いじゃない。さっき会った時のまま、インターホンに手を伸ばしていた。平山がインターホンを押してまた音が鳴る。

僕はどうしたらいいのかわからなくなった。頭が真っ白になるとはこういうことだろう。岡田に電話して助けてもらおうか？ それとも警察？ そもそもここで電話したら僕が中にいることがわかってしまうのでは？ そう思うとその場から動くことができない。

ドアの向こうにはまだ平山が立っている。このまま待っていれば諦めて帰ってくれるのではないかと思ったけれど、帰る気配は一向に見せなかった。

「先輩？ いるんでしょう？ 開けてくださいよ」

平山がまたインターホンを押す。インターホンを押す間隔が短くなってきた。流石に怖い。電話ではなくメールで岡田に来てもらおうか。

「先輩？ せんぱーい！」

平山がドアを叩く。ドンドンという音と一緒にドアノブが回るが、鍵をかけているためドアは開かない。開かないとわかっているけど、ドアノブが回ると焦ってしまう。僕は急いで岡田に助けを求めてメールを送った。

「先輩！ 先輩ってば！ 開けてくださいよ！」

平山のドアを叩く音が強くなって、僕はその音に驚いて小さな悲鳴を上げた。ないだろうとわかっているはずなのに、このままドアを壊されてしまうのではないかと思ってしまう。岡田じゃなくても、音に気づいて誰か来てくれないだろうか。本当に誰でもいい。彼女を止めてくれ！

しばらくして急にドアを叩く音が消えて、代わりに誰かの低い声が聞こえてきた。その声の後に平山の声が聞こえる。誰か来てくれたのだろう。僕はドアスコープから様子をうかがった。平山の向こうに誰かがいる。聞こえてくる声からして男の人のようだ。しかし顔は平山が邪魔で見えない。

何度かやりとりをしていくうちに、平山の声が怒鳴り声になり、金切り声になる。来てくれた誰かは平山を怒らせるようなことを話しているのだろうか。しかし平山を怒らせようがどうしようが関係ない。早くこの場から連れ出してくれ。

しばらくして、平山の姿が遠ざかっていった。平山の前には、平山と話していた男の人がいる。平山が階段を下りていく姿を見て、僕は大きく息を吐いて、その場にしゃがみ込んだ。ようやく行ってくれた。

安心しきっていた僕の耳にインターホンの音が聞こえる。びっくりして急いでドアスコープを覗いた。しかしそこにいたのは隣の部屋の宮本さんだった。僕はまた息を吐き、鍵をはずしてドアを開けた。

「ど、どうも……」

「あ、あの、この部屋から聞こえた声とか音がなんかすごい怖かったんで、一応警察に電話したんですが……だ、大丈夫でしたか」

なるほど、さっき平山と話していたのは警察の人だったのか。どうりで落ち着きがあると思った。この人が呼んでくれたのか。

「ありがとうございます。助かりました」

そう言って僕は宮本さんに頭を下げた。本当に助かった。

階段を駆け上がってくる音が聞こえて、僕ははっと顔を上げた。顔を上げた先には、息を切らして階段を駆け上がってきた岡田がいた。

「お、おい浅野……だ、大丈夫か……」

「う、うん。この人が警察に連絡してくれたんだ」

僕は宮本さんを見ながら岡田にそう言った。宮本さんと岡田が互いに会釈する。

「警察か。なら大丈夫じゃないか？ とにかく無事で良かったよ。結局あいつは誰なんだ？」

「それがやっぱりわからなくて、地元の友達に調べてもらってる」

「誰なのかわかんないってのが怖いな……」

岡田がうーん、と唸って腕を組む。それを見て、黙っていた宮本さんが口を開く。

「よ、よくわかんないですけど、俺も何かできるなら協力しますよ」

「ありがとうございます……もう何もないといいんですけど、もし何かあったらよろしく願いします」

その日はとりあえず岡田の家に泊らせてもらうことにした。必要な荷物をまとめて鍵をかけ、宮本さんにもう一度お礼を言って、僕は岡田の家に向かった。

岡田の家に着いて休んでいると、吉崎から連絡があった。どうやら平山香という名前の生徒はいたようだが、やはり吉崎が言っていたように、そいつは男子生徒だった。高校時代に吹奏楽部だった友達に聞いたらしい。その友達が言うには、クラリネットを吹いていて平山香という名前は一人しかいないということだ。そして去年手術をしたらしいということも聞いた。その友達も何の手術かまでは知らなかったようだが、今となっては性転換の手術でもしたのではないかと思ってしまう。そこまでして僕に愛されたかったのか、それとも他に何か理由があったのかは、本人に聞かないとわからない。しかしもう平山とは当分会いたくない。もしかしたらずっと謎なままなのかもしれないけれど、会わなくていいならそれでいい。僕は吉崎にお礼を言って電話を切った。

数ヶ月経っても、僕の前に平山は表れなかった。僕のことを諦めてくれたのか、たまたま会っていないだけなのかはわからない。岡田たちは良かったじゃないかと言ってくれるが、僕は少しも安心できずにいた。僕は見えない平山の存在に怯えながら、毎日を過ごすことになった。

この町が今だかつてないほど酷い状態だということは、この辺りでは有名な話だ。いつからそんな話がされていたのかはわからないが、気がつけば皆口々に今の町は酷い有様だということ言っていた。たしかに数年前よりもとれる魚や野菜の量が減ってきているし、いつもならとっくに咲いているはずの花はまだつぼみのままだった。気温や天候も予測がつかない状態で、明日は晴れるだろうと思っていたのに雨、なんてのはまだいい方で、冬はとっくに過ぎているはずなのにいきなり雪が降ってきた、という報告も挙げられているという。

「それで、俺にこの異常状態をどうにかしてほしいと？」

俺は目の前で申し訳なさそうに話す二人の中年の男を見ながら言った。

「ええ、あなた様の噂はわたくしたちも耳にしております。なんでも以前北にある町を救ってくださったほどのものすごくお強いお方なのだから」

「今この町が大変な危機に陥っているということは、今お話しした通りでございます。どうか今一度この町をお救いくださいませ！」

そう言いつつ、男たちはまたぺこぺこ頭を下げる。

俺は数年前の旅のことを思い出した。あの時住んでいた北の町も今のように酷い有様で、俺はじっとしていられなかった。町を飛び出して旅先で出会った人から話を聞き、被害を加えていたやつらを片っ端から退治していったのだ。その結果数年で町は元に戻っていき、人々は俺を勇者と言って讃えた。

しかしそんなことがあったせいか、人は何かが起こると俺を何でも屋であるかのように頼るようになってきた。そのほとんどが小さなどうでもいいものばかりで、それはどの町に移り住んでも同じことだった。今回もきっとその類いのものだろうと思っていたが、まさかまたあの時のようなことになろうとは。

「行くのは構わないが、頼んでくるからには情報か何かあるんだろうな？」

「ええ、もちろんございます。とっておきの情報でございます」

「彼の山に仙人が住んでいるというのは有名な話ですが、なんとその仙人がこの町を変えてしまったというのです」

仙人と聞いて、俺は噴き出しそうになった。子供たちに聞かせるおとぎ話の中に、たしかにそういう話がある。とある山に住んでいる仙人の機嫌を損ねさせたために大変なことになるという話だ。しかしそれはおとぎ話であって、この世には存在しない。

「待て、その仙人というのはおとぎ話の人物ではないか」

「ご存知ないのですか？　それが本当の話だったのでございます」

「何人もの人が彼の山で行方不明になっているのはご存知でしょうが、それらはすべてこの仙人によるものだったのでございます」

(仙人、ねえ……)

真面目な顔で話す男たちを見ると、とても嘘をついているようには見えなかった。しかし本当に仙人がいるというのも信じがたいものだ。だが場所がはっきりとわかっているということは、

やはりそこで何かが起きているのだろう。

「……信じがたい話ではあるが、この俺が直々に調べてきてやろう」

「ありがとうございます！」

「わたくしたちにはもうあなた様しかいないのです！　どうかよろしくお願いします！」

男たちは先ほどよりも深々と何回も頭を下げ、足早に俺の前から去って行ってしまった。俺は未だに半信半疑だったが、男たちに頼まれた通り山に住む仙人の所へ行くことにした。

十分な食料と飲み水、マッチや防寒着などを鞆に入れ、少しでも情報を手に入れるべく、町の人たちの話を聞きに行った。新しい話は何も聞けなかったが、男たちが話したことと同じようなことを皆が話していたことから、どうやら仙人は本当に存在しているようだ。

地図を見ながら場所を確かめ、町から案外離れていなかったことに拍子抜けしつつ、俺は町を後にした。

(特に変わった様子はないようだが……)

今にも雨が降り出しそうな灰色の雲を気にしつつ、肉眼でも十分に見ることができるその山を見て、俺は本当に仙人がいるのだろうかと思った。皆はいると言っていたが、今から行こうとしている山は、どう見てもそこら辺のものと大差ない普通の山だった。植物が生い茂り、近づくとつれて鳥や動物たちの声が聞こえてくる。想像していた禍々しいものからかけ離れていたことに戸惑いを隠せないまま、俺は山へと入っていく。

山の中もいたって普通だった。植物、虫、動物、水……どれも変わったものはなく、この山だけが、異常状態の世界から孤立しているかのようだった。そういう点では異常なのかもしれないが。

(何か特別なもので守られているのだろうか……ん?)

近寄ってきた羽虫を追い払いながら耳を澄ますと、水が叩き付けられるような音が聞こえた。音のする方へ歩いて行くと、少し離れた所に何匹かの動物が集まっている。おそらく滝があるのだろう。

あまり音を立てないように近づいてみると、やはりそこには滝があった。滝と言ってもそれほど大きなものではなかったが、大量の水が流れ落ちて飛沫をあげている。その周りでは鳥が飛び、流れてきた水を動物たちが飲んでいて、自然の音しか聞こえず、人の手が加えられていない美しい場所だった。晴れていたらどんなに幻想的な場所だったのだろうか。こんな場所があったとは……帰ったら町の人たちに聞かせてやろう。

滝のすぐそばに目をやると、人が立っていることに気づいた。体格や服装からして女性のような。俺以外にもこの山に来た人がいるとは思わなかった。しかしさっきまではいなかったようにも思われるが……俺の見間違いだったか。

俺が女性に近づいていくと、女性も俺に気づいたようだった。特に逃げるような様子も見せなかった女性に、俺は声をかけることにした。

「こんにちは」

俺は笑って挨拶してみたが、女性はにっこりと微笑んだだけで、視線を滝へと移してしまった

。せっかくだし、この人にも話を聞いてみよう。

「少し話を聞きたいのですが……この山に住んでいるという仙人の噂はご存知ですか？」

俺が仙人と言った瞬間、女性は顔を上げてこちらを向いた。おそらく何か知っているのだろう

。

「仙人……そう、今回はあなたなのね」

「今回？」

今回、というのは何のことだろう。俺は仙人について知っているかどうかを尋ねたつもりなのだが……

「おめでとうございます。あなたは世界を救う勇者に選ばれました」

女性は微笑みながら、少し大げさな手振りでそう言った。あまりにも突然すぎて、何を言っているのかさっぱりわからない。

「勇者？ いったい何の話を？」

「あなたは全人類の中から選ばれたのです。これは名誉ある素晴らしいことなのです」

「は、はあ……」

会話にならない。いったい何を言っているんだこの人は。たしかに俺は勇者として讃えられているが、それは今に始まったことではない。何か他のことを言っているのだろうか。

「すまないが、先を急ぐのでこれで……」

「そうでした、きっとお疲れでしょう……これを」

女性に背を向けて歩き出そうとした時、女性が俺に筒状の何かを手渡してきた。持ってみると少し重く、揺すってみると水の音がした。液体が入っているようだ。持ってきた飲み水も残り少なくなってきたところだしちょうどいい。

「これをお飲みください。楽になりますよ」

「何かはよくわからんがもらっておこう。ありがとう」

ここまで来た疲れとどのどの渴きもあって、俺は女性から貰ったものをその場で開け、中身を一気に飲んだ。

水のような味が少し甘い。これはいったい何なのかと女性に尋ねようとしたところで、俺は世界が回っていることに気づいた。体もいつもと様子がおかしい。もしや毒だったのだろうか。何が何だかよくわからないまま女性を見ると、女性の隣に見覚えのない老人が立っていた。ああ、俺ははめられてしまったのか……体がバランスを崩して倒れる途中、意識が遠のいていくのがわかった。

農作業に疲れた私は、曲げていた腰をのぼして空を見る。いつの間にか午前中から降っていた大粒の雪は止んだようだ。冷たかった風もほのかに暖かくなっている。

「おい、雪が止んだぞ！」

隣で作業していた男も私と同じことに気づいたのか、手を広げて叫ぶ。このところずっと雪ばかりだったから、その表情は嬉しそうだ。

「本当だ……ということは、あの勇者は無事仙人様の元にたどり着いたというわけか」

「勇者？ ああ、今回はあの人が選ばれたのか」

他の人も口々に勇者の名を呼ぶ。私は数日前彼に会った時のことを思い出した。あの時は駄目元で訪ねてみたのだが、案外アホで助かった。思った通り適当に褒めていたらその気になってくれた。元々よそ者で仙人様のことも知らなかったようだったし、町の皆もあまり良く思っていなかった。彼は犠牲者としてちょうど良かったのだ。

「これでしばらくはまた暮らしやすくなるな」

「勇者に感謝しなきゃな」

「身を以てこの町を救ってくれたからな。ありがたやありがたや……」

何人かが空に向かって手を合わせ、適当な感謝の言葉を言う。

この町に住む誰もが皆、このことに一度は疑問を抱くだろう。私もそうだった。しかしそういうものなのだ。何年かに一度は誰かが犠牲にならないといけないのだ。

でも少し期待はしていた。もしかしたらやってくれるのではないかと。私たちでは無理でも、もしかしたら彼ならば仙人様を討ち取ってくれるのではないかと。しかし彼も所詮は私たちと同じ人間だったのだ。

私は次の勇者が現れるのはいつか考えながら、再び腰を曲げて畑を耕すことにした。

寄せ集め

<http://p.booklog.jp/book/64722>

著者：るざき陽真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/youma-youma/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64722>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64722>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ